

## 私が愛した映画たち

写真は吉永小百合さん(取材・構成 立花珠樹)による集英社新書新刊。中学生のときの「キューポラのある街」から、最近の「母と暮せば」まで、吉永さんとの「付き合い」はじつに長い。巻末掲載の「吉永小百合 120 本出演作リスト」をみると、私が観た映画は 2 割ほどだろうか。でも本書を読んで、吉永さんの映画と演技へのひたむきな思いが伝わってくる。紹介したいことは多いが、二か所だけ書きとめておきたい。

私はあのとき、いつか「女・笠智衆になりたい」と思って、それ以来、今でもずっと言い続けているんです。それで山田洋次監督に、よく笑われますけどね。本気なんです。笠さんのように、せりふがなくても、例え背中だけでも、いろんなことが表現できるような俳優に究極的にはなりたいと、思っているんです。それほど、初めて共演した『愛と死をみつめて』での印象が強いです。

私は 1945 年、日本が敗戦した年に生まれ、戦後とともに年を重ねてきました。私の中には、戦争の時代が再び来ないように、「戦後」という言葉を大切にしたいという思いが強くあります。山田監督は、平和を守っていくためには、戦争の歴史からもっと学ばなくてはならない、と発言されています。私も、映画の仕事をしていく中で、常に、そうした歴史に関わっていきたいという思いがありました。二度と日本が主導権を持って戦争を起こすことがないように、とずっと願ってききましたが、戦後 70 年を過ぎるあたりから、戦争の足音がどんどん近づいてきているようで、とても怖い気がします。『母べえ』のように、戦争に反対すると投獄される時代が再び来ないために、『母と暮せば』のような原爆の悲劇を繰り返さないために、『北の桜守』のように民間人が戦争に巻き込まれる事態を二度と到来させないために、平和のために役立つことを発信し続けていかねばと思っています。

映画の仕事とは別に、原爆詩の朗読や、福島原発事故の被害者の方たちを励ます活動はライフワークとして、ずっと続けていくつもりです。

戦争がない世界、核兵器がない世界を目指して、平和の大切さを訴え、平和への思いを次世代につなげることに、少しでも役立てれば、と願っています。

(2018 年 3 月 18 日)

